



物類考

~13  
4269  
4



NS  
4269  
4

物草太郎卷之四



第七回

孤臣寄思洛陽雲

三傑會盟鹿溪地



史忠臣を危急の際より顕る信あり武浅井屯る父の遺  
 教は刻も忘る半好く分身を志す西道に抛て美  
 里の波清江志の元依渡の例に至り旧若様を所を渡り謁  
 見奉る事亡父の素志成す事六右衛門渠が忠を金  
 石のどろかたれとて言ふ一給の回のどろかたれは周を  
 通の書成家の小幡手中将軍たるは元昔以命に救うの  
 言語を流く町囀あり懸くいふは賜うと控へ屯る其

本林  
寄贈

91-2149

前次よりぞり船行戸家以回り同殿の賑商にぞり代等待  
て船船と出づ唯風ぬ帆をたけきて恙なく船中の儀より  
入船しこころ陸路に星夜舟をたかして京師へ  
大文多金八が宅に安頓させば迎接く懇々款待し  
駕籠の儀儀儀とめ依渡の御まきの光景と詳細より  
古交の志に達し情恩をよめありけしきつたまは昔  
歡の尊親も昔泉より喜びしをめで喜酒をたか  
うさゆけのおと金八より休歇早晨より起出て朝飯を  
喫し修養休むる衣服はあつあつの書を懐中し深草  
み郷の姓澤草中侍の門より打問訊は問吏應諾して

初四

内中廻りたる中侍より次聞入る見ゆと屯親隨の  
士はあつあつ連々其前には鳩首礼有様々稟道に臣  
と右衛門尉の多士沙井屯中侍のから密に奏し  
半のさむくば怒りて化聴と遊にまらぐく云々中侍  
左衛門尉の士は遠ざけたりと屯懐中より一封の書物  
しこころ呈し右衛門尉より宛の料を得て遊地よ  
遠ざけらるめおび翼妻や鳥のこゝ忠をけり云々  
計較にめらるるあつあつに虚しく逆臣の爲に朝廷の清  
及び穢しめ主上は震懼を悔まらざる今朝迄の忠  
臣よりぞり此言に告奉らば人々より公遠く計り

皇  
の  
國  
に



淺井  
中將  
の  
右府  
の  
書を



深く慮ぐ逆賊と殊く上主との震懼と安ん奉り  
下倉生の塗炭に免れぬ後と叮囑の言は演る  
山中持即書は拍開て観有るを我智浅く奸臣  
圈套に陥り今敗れ干隔滂の身とせぬは尚忠誠  
の心天日のごとくかも其意を白にあらはるるは  
壁言如波斬の水瓜をさるに似ら君も忠臣格ども  
驚れ千里の行を歩むるごとく此心ありとまはさ  
まのや唯たのむとらき公慷慨の志朝廷は奸臣  
追退けて海宇を掃清せん事を倘生前一面の信を  
我継令ふはも悔れぬの言ありは將士誦讀せしむ

向は我右肩と断金の交りよの寛と知るも力微  
くは為らざるは雪とてゆらげぬも平常懐又  
くは奸臣威權重諸臣導く所使しとこの  
使令を作ぐ某一人の力抵敵をたうはむと年光を  
消やり某渠に屈体せぬとめをけるを俚怨のをも  
も我れも機は應へる言は臨んて渠を言心の宿窟を遊  
らぬに元事かざるは得らるまは諸王子君長も然則  
の向も今希に親く事成奏するは免れぬと主上を見ゆ  
こころは安ん事成討てむと奸臣のめを害せむ  
を怖む時節とてひあはばより詳細な証流あり

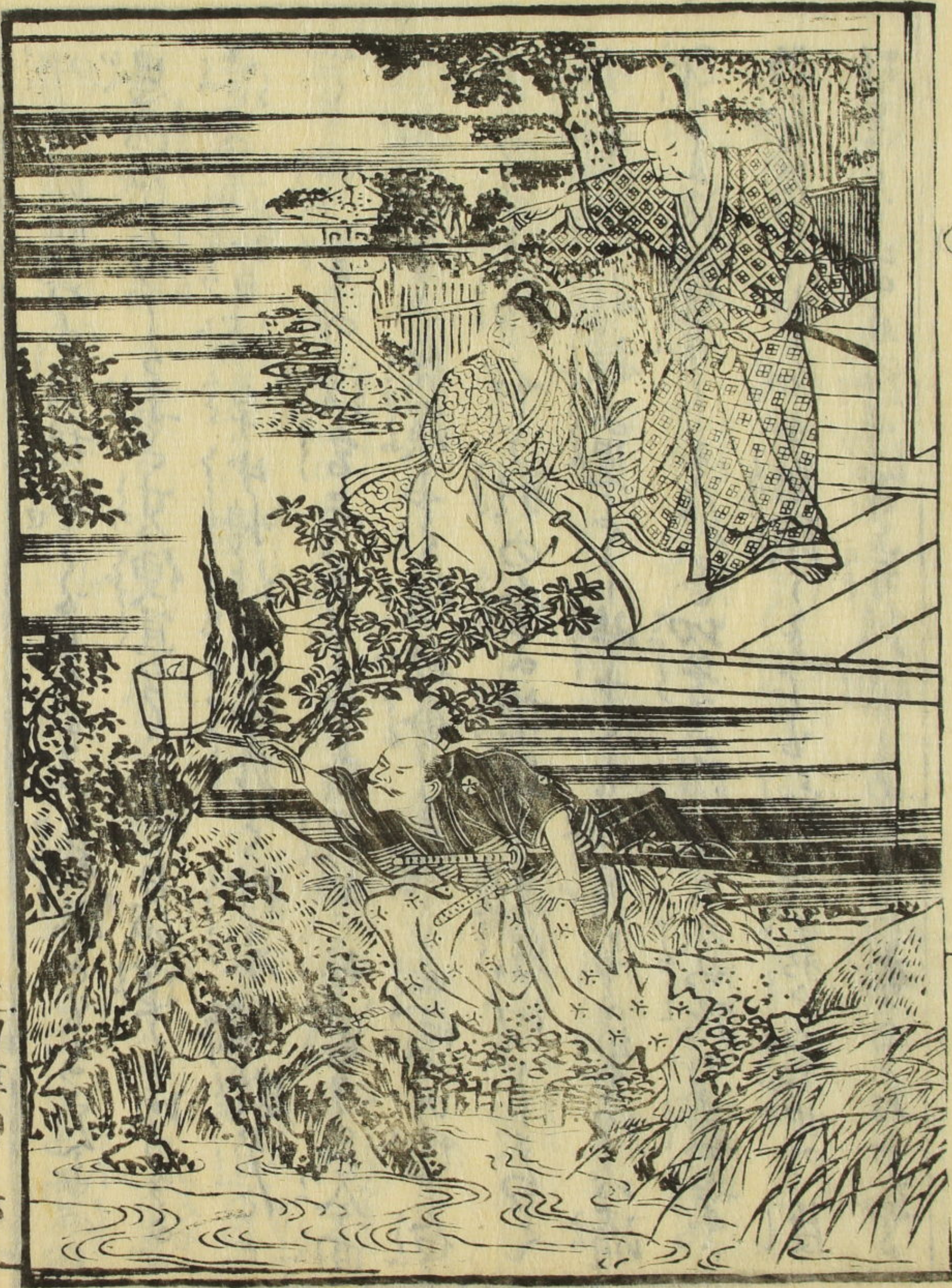
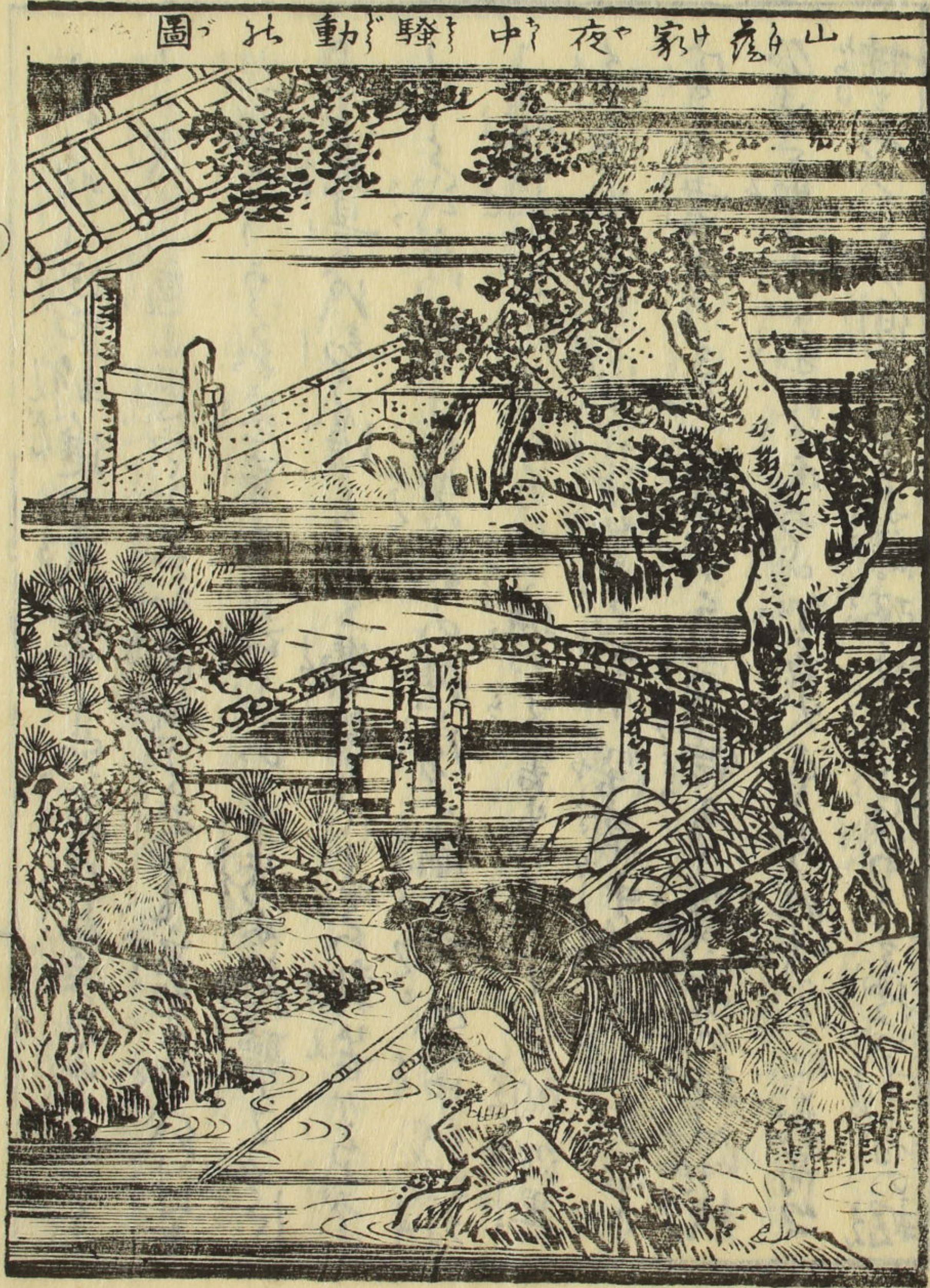
て右府の托すくも上主上の為下文遊の寛屈の重なり  
又北畠山蔭の兩郷を當朝の管長より相与に力以て  
討らんあつてゆへに治を安んずらんといふも  
梓別を以て出さる却洗深草の中將を或日密に山蔭  
北畠の兩郷に招き清く右府の書とあててつらく長岡  
王子宇治の左府克悪を逐め一賢良公治書し忠  
漣を拒くこの長岡右兵衛尉を殺し奸曲邪偽の  
去らます酒色を統養生を致す者らに賦税たり  
隣り横暴の拳動天下に齊に怒を起す我天下の爲  
其害公深んと欲し二雋熊を相与に克逆を除く

良策ありて教らるるに北畠山蔭の兩郷を以て有  
て貴兄とて女国家の為に努力を以て残賊を追討  
せし事固より情願ならずと稟さるるに中將之も言ひ  
一領の圖書に依りて血押とぞなすりて列位の下  
より個々謀を密に以て奸曲を問ひ自ある世の  
當時威權の王子左府を以て深草の阿を奸偽衆を以  
て聖公訛言とてそのを探聴し報告しるるに害致す  
と尙我府の謀洩れ去りて國家は益を以て計謀  
とて言ふと致す人境遠き僻靜の地を命じて可なり  
とて即是深草中將の長岡雄丸とて南未十三歳

の童子もまじりて身長五尺餘ありてカハ鳥獲のどくどく  
万均のまじりと扛智をふる房陣平をおとせし得たり中將  
とけしる西郷も一奇な此縁をうぶなりしと洛東鹿嶋の  
深山幽僻の地をとて時々箇地を會して評議せしむる  
今も説合侯とて其遺蹤あり源平は時僧像實乃次  
泰頼成経の二個の地を争ひて平氏を滅さんと謀り  
う世人傳章中將の半平の事ありし説合侯の名後賢  
のあふ評し争つて公謀をこし其子山彦の弟の新進の王  
小未堀民部とてこのあり強盛のふんちりしと平家  
長同まの宗信の左府兩個の権貴とて美政ありしと西の

中も附驥ばより利市とるりたまふ然ももよさん  
思ひあらしし事とて便宜なくして日改道し河の  
這遭整自深草中將北畠山彦と往來頻數りたと  
や、密半の説言ありしと民部暗思する今回  
の光景まゝ鹿溪中後秋會と稱し三個の地を會  
合ありしと何とやしの會を推故て南條のりしと  
將就して打探し見ると些々も説異なる半のりしと  
即ち其報告しそ事を切方と附驥てみ路の基業を  
およぼしやむむと點頭するも三個の多士累世の臣  
たしどもよめ評議の言紙圓一のめとてお教とせし

山居夜中騷動此圖







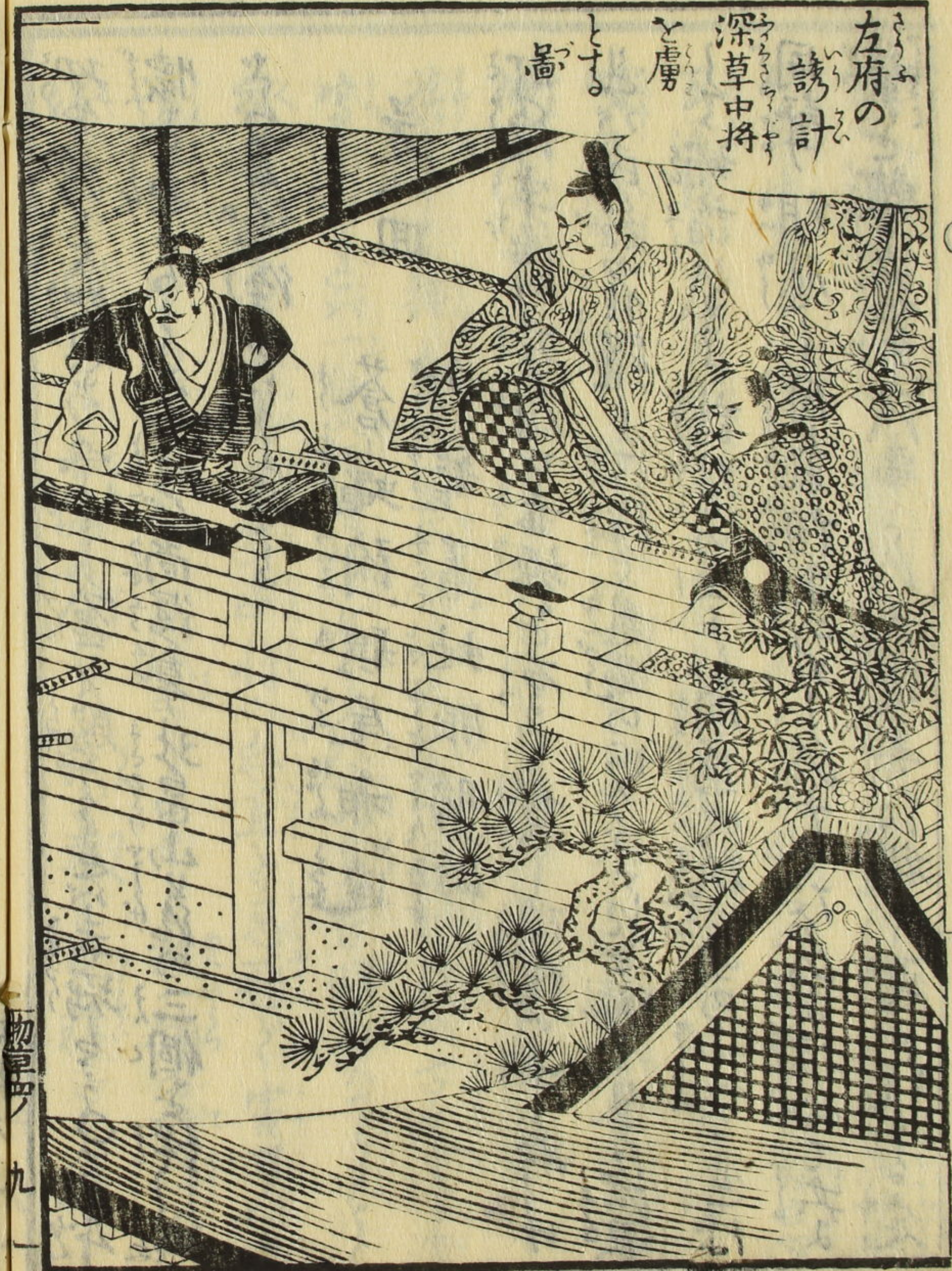
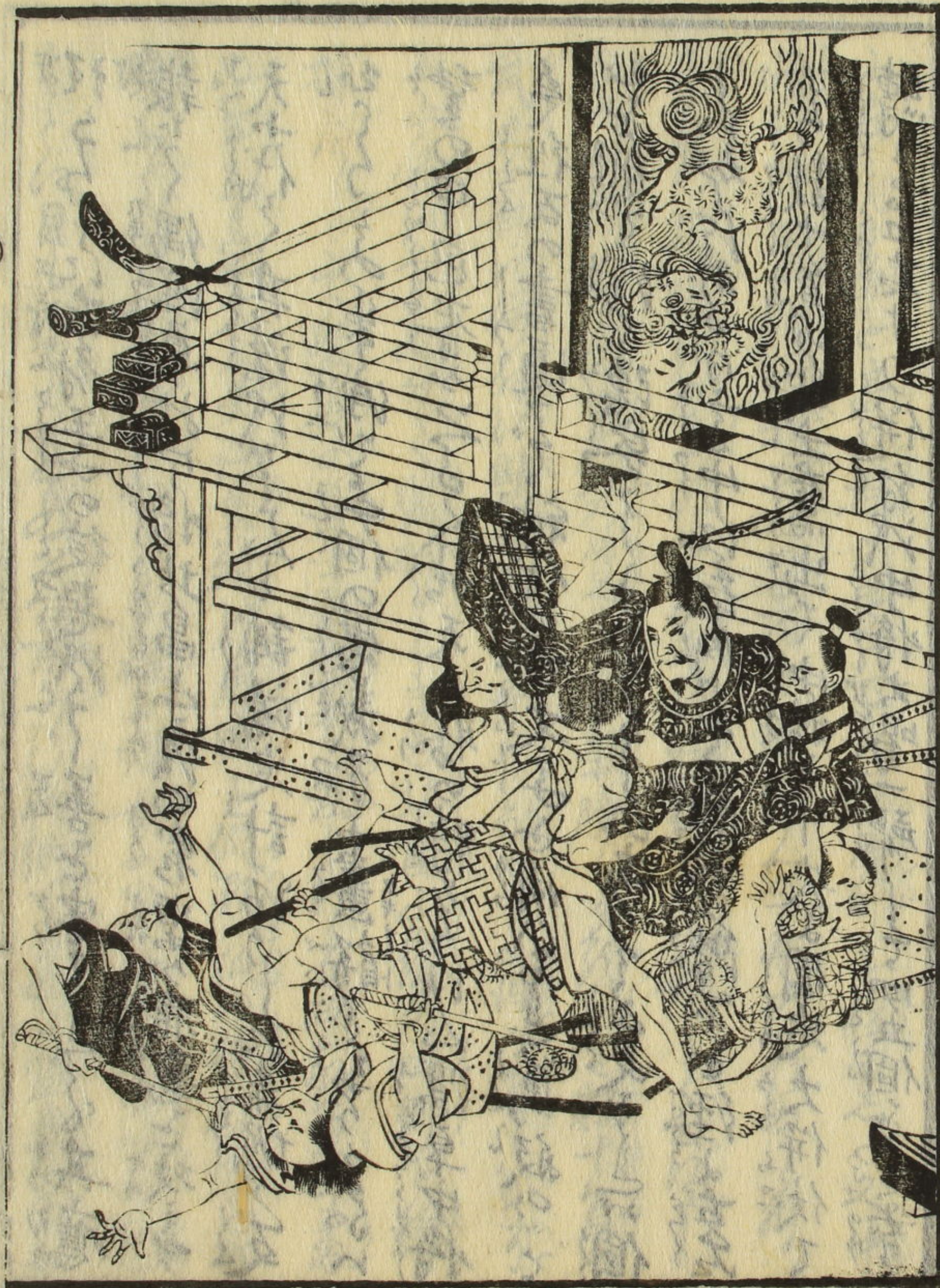
賤の小生階下に於て尊聴そんちやう以も牝め々々今いま回かい深ふか草くさ中ちゆう將しやう  
北きた島しま中ちゆう納なつ言ごん山さん蔭いん大だい納なつ言ごん三さん個ごのの北きた車くるま明あきらのの権けん貴きとと奴やつ忌よ  
又また逢あ氏しるるんんとと整せい日じつ密みつのの會かい議ぎととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得え  
明あきらのの小せう奉ほう一いつ奉ほうのの樊はん籠ろう附ふ風ふうととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得え  
便べん房ぼう内ないのの密みつ書しよ得えししままとと上じやう奉ほうふふああとと書しよととああ  
若わかくく捧ほうととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた神かみ代しろのの古こ文ぶん字じとと  
字じくくななとと一いつ隻しやく行ぎやうもも詩しととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた其そのまま否いな明あきら白はくななとと  
ああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた平生へいぜい深ふか草くさ中ちゆう將しやうのの忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
深ふか草くさ中ちゆう將しやうのの忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと故ゆゑ一いつ個ごのの輕けい計けい以も  
得えととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと

功こうゆゆととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
懷わいととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
ととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと

才八回

蒼そう蠅りゆう附つ驥ぎ尾び希き達たつ  
小せう龍りゆう着ちやく蛇だ眼がん晦かい跡せき

打うち鏡きやう宇う治ぢのの左さ府ふのの赤あか堀ほりをを有ありり賞しょうしし隨ずい後ごのの才さいをを好このむむ  
ととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
ととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
ととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
同どう聲せい相あ應おうしし同どう氣き相あ求もとののかかひひととななひひとと好この合がてて女によ  
ととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
ととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと  
ととああ氏し長ちやうのの把は柄へいとと得えたた今いまとと我われのの事こととと忠ちゆう直ちやくとと忌よ惡あくとと害がいとと

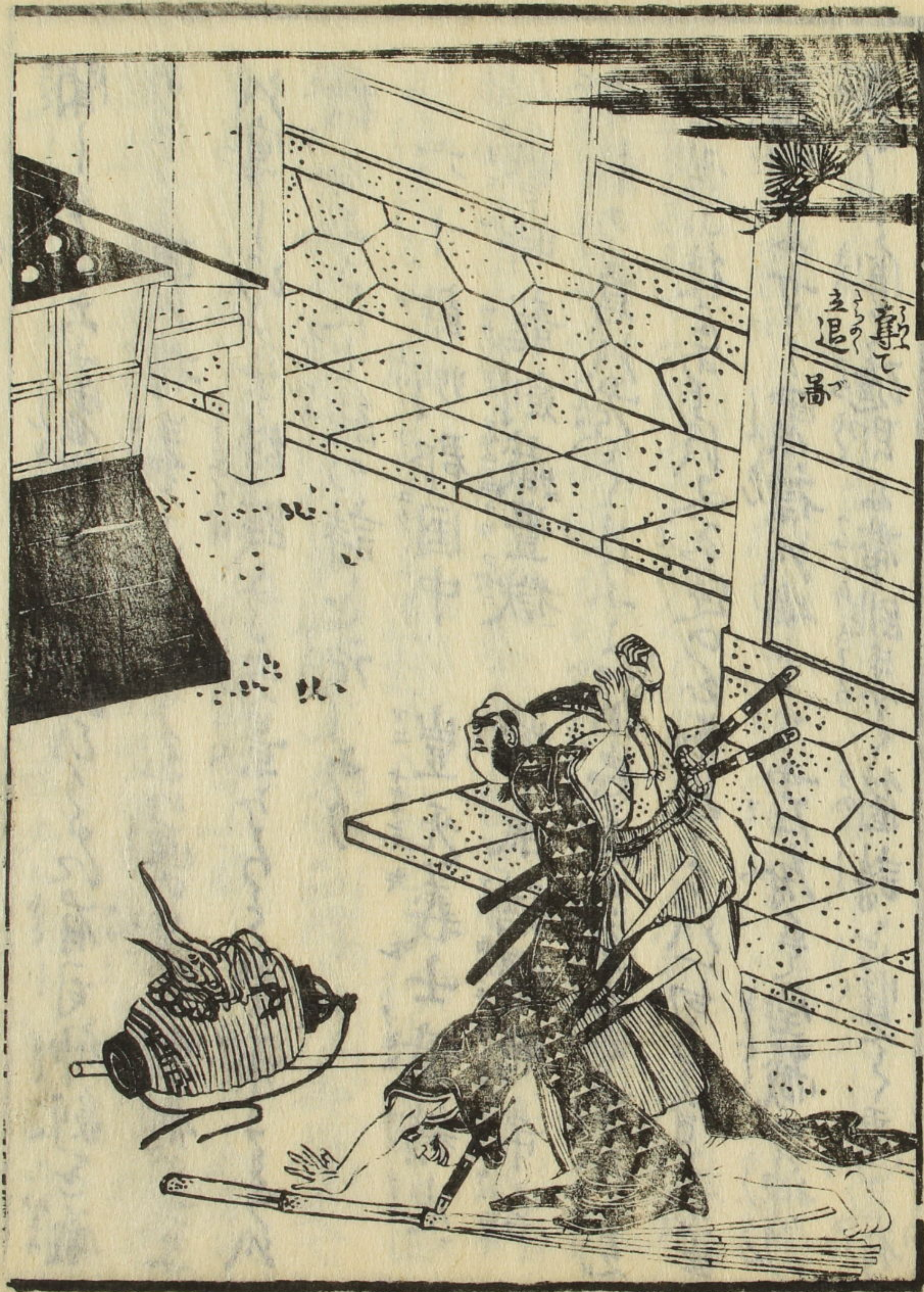


理よりしに左府王子の徒悪はう善と害とをばも其應  
報なく偶深草中將北畠山彦の衆渠が罪惡と攻む  
天代く其誅はんと誦謀定計ありしに赤堀が反  
むらうの半津いご個の忠義を畫解とありさふい  
夢の申包足がころ人独天也勝の時けけん深草中將  
之往互の書通がぞ神代の古文字を用ひらば萬般のこ  
むを用て深く隠密うとつとくひありさる受りて個  
ふ知はある日さ中にま内と南殿の階下と経は古名  
ら數十首の武士奮出て中將と中央は圍定大併伏て  
縛と左右より併付中將大喝一聲して四五個とを去る

小左府簾と高く捲あきとせ赤堀民部を後をてぐ中  
將は睜着眼で殺才この者と滅めん今更のぐぬぬ形  
先益の搦隘はくはと東手に縛縛とくくく  
よの中將も密事み覚くと氣臆く多敷れを殺十首の  
武士一舟に併付に雙手を四手う敵をの理りやうびり  
小中將はをぬせと監押とまは北畠山彦の兩郷を緝  
捕はくとく衆多の武士を兩家へ差つけよ兩家と思ひあ  
ぬ事よと大矢張矢致は命威と假珍狐の徒敵圖を打  
壞ふとと乱暴とあうと程は婦女のくもつと啼哭の色  
まはる目もゆくととあ光景あり兩郷も遂は監車の中

縛られし逆相府へ解きたまふ這深草中將の男雄丸  
を此う瓜園くちふ勢をた定く我方もまふあん縦念  
十鳥ゆりともがさうしうら破伏り力無きが肝を破く  
赤ふんふと刀の眼釘と濕しけらけらうりく沈思とめ  
ぐらぬこは暴斥の勇ありさうがと又の捕提なすひぬ  
と休よ着もふる者の道ぬわんぬさうさうさうさう  
渠が縛とさうて北赤死ん中へお童子智浅て  
目下又の難を救得るさうらぬる若の飛ゆらせなす  
童子国の鳥家たぬ那里す一面身を滑さるる長束  
とわして若又の難を後らうとさふ勢ひ又想るるさう

と勢ふおれたる一個神靈の力に修もさるる衆人の眼後を  
まじりて或夜お初ぬ官中の宝藏を偷ひつる二品の真二個  
天の郵雲の宝剣と奪ひつる墻壁のつる躍下るさう  
以巡邏の武士さうさうは目さる曲者中じと攔住と雄武丸  
二個の打撃に叫と作し倒伏と跡はも見ぬさう一閃電  
のさう那里さうさうは逃去る路守の武士さうさうさう  
を引回して此うは養いさうさうは帝も大勢をせぬ王子  
爲二個の踏扈は驕暴と生疎なすさうさうは又二個の又  
くさうさうさうは宝庫さうさうはびさう神剣と奪ひつる



聞しるはたふ震襟と探め給ひるに有司神剣を蔵  
ありし連以捧まき奉りしるる連の蓋は數個の文字  
以寫しし半踏踏あり先景をりしるは帝のまは  
歡有ありし七絶の詩を記しあり

六十餘州郡國中

豈无義士憶精忠

暫時龍劍藏豊獄

紫氣猶懸照帝宮

帝請の意は考へ給ふし一個忠義の氣多言ひ見  
尋常の徒あり又互送のふありし一句の詩は身半  
を削りぬし震襟は安しる左府を宝藏の神劍  
表ありし圍て隨即は帯跳まき箇詩を賢く懸り有

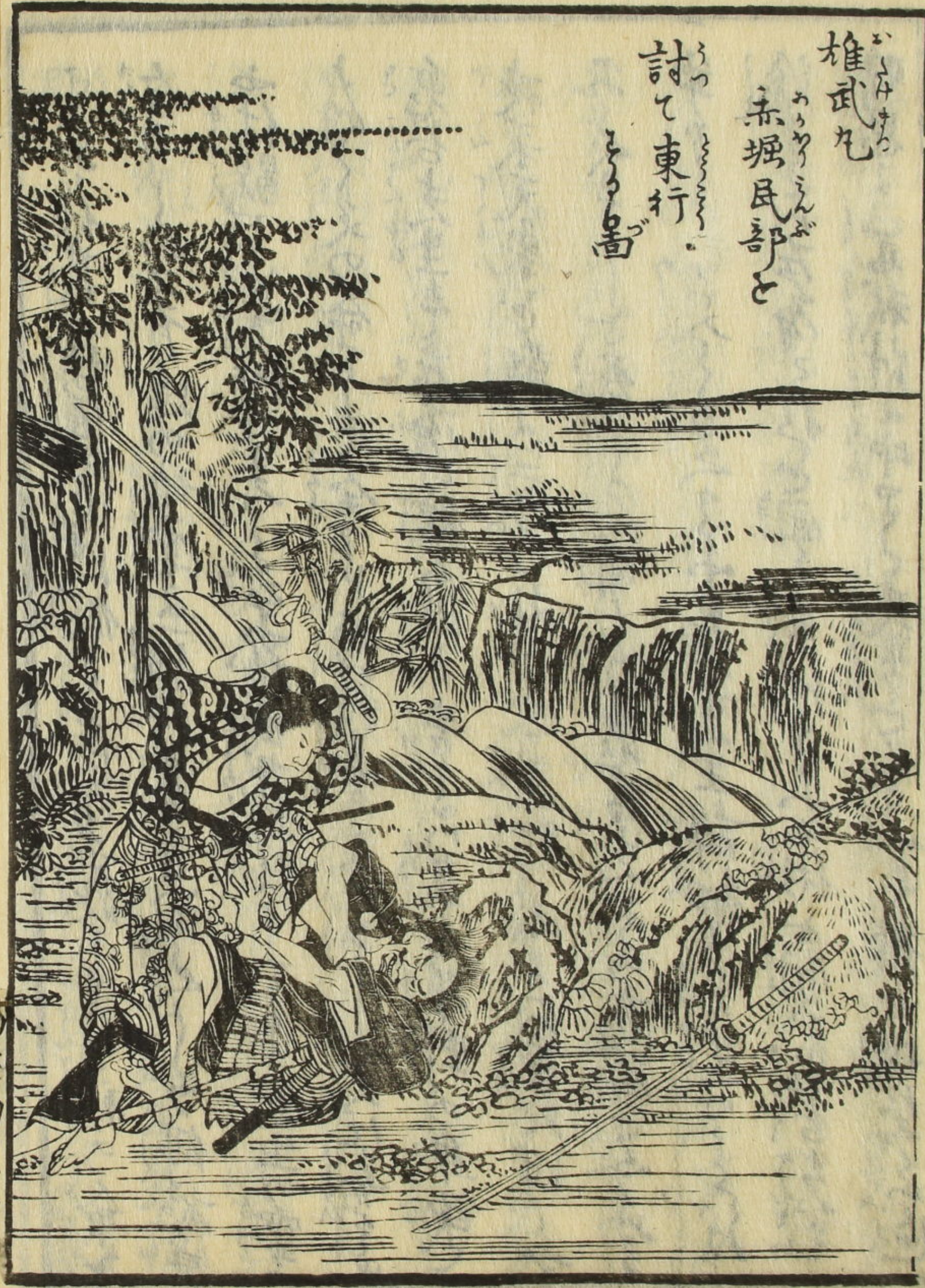
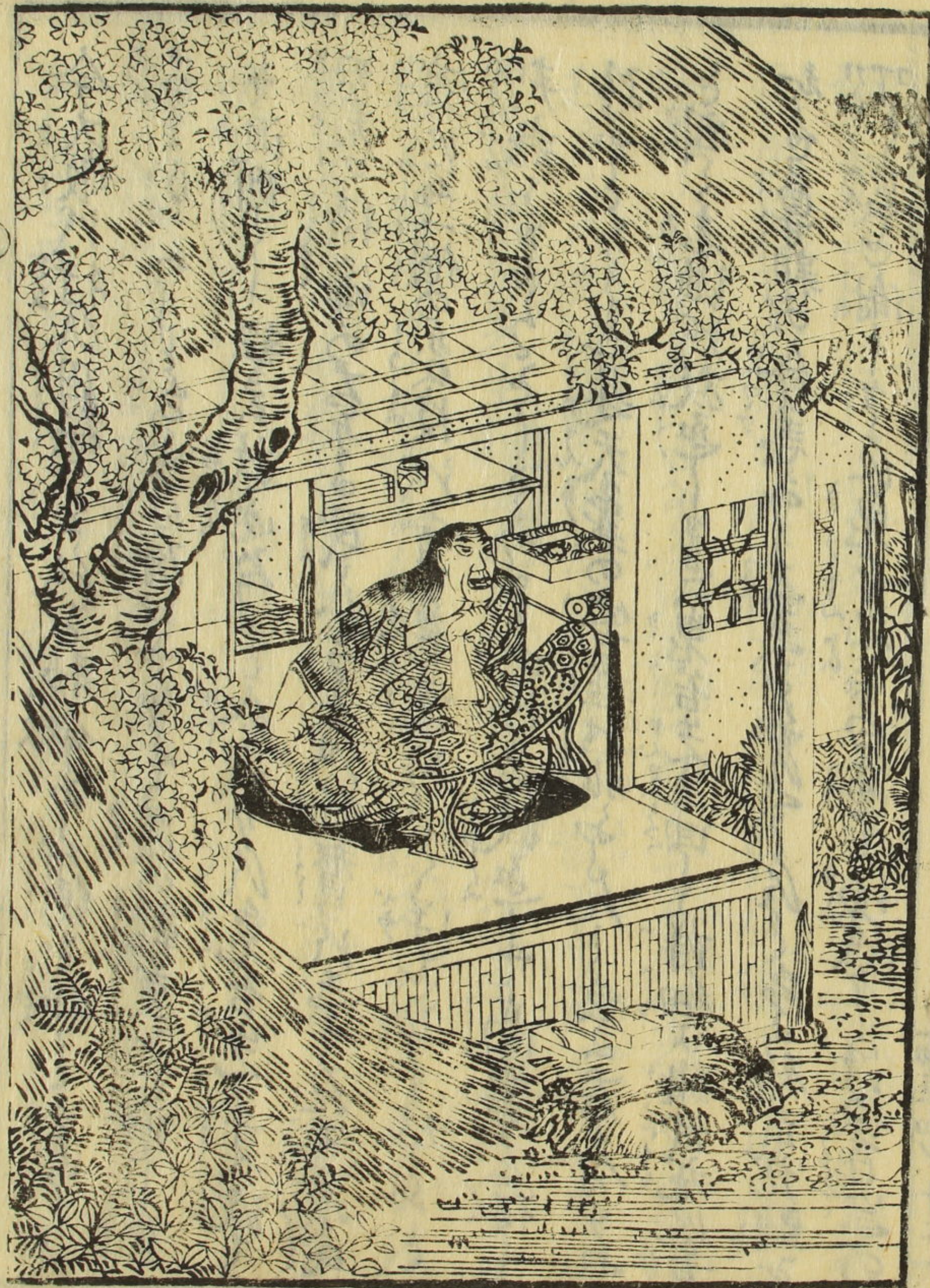
河を命じて巡邏の武士は昨夜宝庫に潜入し漢の  
先皇は審問し渠が相面となつぬふふ一齊は夜間の  
才力ありし公明がしるも身は皂帛衣と穿眼罩  
子面をかきし腰は挿雙力の崇埔は躍下と兩個の卒  
扯住しるに渠が一個の打拳おの氣を表ひしり我門  
分頭はなりし跟尋まき追討しるる行方と知は回  
りしと云ふ左府沈吟半晌ありて急は門は張掛持文て  
緝捕官の命じて天下の郡縣中に分頭して四下と捜通  
とてしる令はかりしるる雄武丸が為る態はあり

さうしつ固より童子の半はくいませ世に出る官路の交通も  
かく又替力衆も起る邏卒は打撃く道理の妙術等困の  
ひざらふゆは詩句の高調うらぐはく童子の拳動  
あふさびくも秘智の在解たはともうれをさうざりし  
もくくくちかき却返字治左府も宝蔵は深へ士の手  
何れも方氣思ひをりけくさき心誓くとして樂めた  
色も一語又根の思を磁繩の臭と悪く帶傷足の深く  
はるれりくくは後思ひをくさうり無ふ深草中將を繫獄  
乃身もろりけくくさうり盗入室蔵は深入室剣をくくひま  
退くと聞てふあもくみ何れも難人けくくはと心を傷めはが

防守の武士は話説を聞ゆりく雄武丸が所行なるがうと  
意思も深く喜びはまきさうりく丈夫の志たのくく今も  
戒めさうりくも憂るくくかたをも兎の志を過くあふひ  
克定の後滅亡くめはく天神地祇に祈りひく又這ふ  
西山嵯峨の形く中草の扉をとて志を高尚し聞達を  
くくあふまき旬におきりめさくも朱胡皓髪あて老  
健の一奇人あり上天象に通く下地理はあふ強天の  
徳も遠くあふその徳はあふく人多く鬼谷先生くあ  
雄武丸も時常に箇鬼谷先生に後ひ學をくく遭次  
のあ難より微行く車園は赴くと準備一行を以て打







おんすけ  
雄武丸  
あつた  
赤堀民部と  
討て東行  
とつら  
畠

今大赦行ハ因獄の事ヲと助命ハ徳を授くる事ナリ  
大赦ハ行ハレトモ左府は亦も罪の輕重を論ド重  
と流刑ト一輕き放逐ト今ハハ鬼谷先生又流  
日君の徳澤の及ぶる民ハ稱賀ハ志するに遭次民  
密にハ一個の皮ハ金と爲す事アリト送せりト  
判語トヤリトそのめら放逐ト高徳を稱  
終つて行くと見天象の客星ハ兆せんト云左府これ  
と聞くと堀河放逐ト鬼谷先生曰く様細ハ雄武九に告  
知セ尊親の命恙アリト云々ト云々ト雄武九頭を  
叩き恩を謝し鬼谷先生曰く汝ハ汝ハ首途の

堀河の首ハ進んで一言も畢らぬ事堀河部を巳の  
惡身と改む左府の館ハ追出されバ法者ト其の志  
悔ありあき善士ト云々ト鬼谷先生と其心恨  
殺才の老悖撃果ト云々の情を散々と門首にまう  
がと鬼谷先生雄武九ハ眼と息心期ハ雄武九當得刀を  
挿く躍出ると事堀河部ハ三つ殺才三個の忠良ハ  
害し今も事あり頭を授ると罵る事其臭臭臭  
ハ一撃する事雄武九閃と身ハ脱し奉成る事  
堀河は依とばよく斬りた力ハ雄武九が一撃ハ腕麻本  
とらら刀ハ身然と地ト下墜し勅令とらら雄武九

明是るくふ乃氏様よりよく民衆が首の水もたまれば  
下へ鬼の先生に向く先生の自の志門出の地を幸と賜  
ぬるよの感激より尚も本望は達しむ目出と持参る  
海へと告辞し重國として下り給

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

物草太郎表書中紙

物草太郎

